

第12回これからの北海道立近代美術館検討会議 議事録

日時 令和6年(2024年)5月15日(水) 10時30分~11時30分

場所 Web会議システムZoom

出席者 別添「出席者名簿」のとおり

- 議題
- 1 北海道立近代美術館整備方法等に係る技術的検討調査の結果について
 - 2 知事公館・近代美術館エリアに係る道民等からの意見聴取の結果について
 - 3 その他(報告事項)

議事

- (1) 議題1 北海道立近代美術館整備方法等に係る技術的検討調査の結果について

ア 事務局から資料1-1、1-2に基づき説明

(特記事項)

・なし

イ 質疑応答等 (有)・無

(北村委員)

第1回の会議の際に、当時の座長から「ワクワクする美術館にしたい」という発言があり、それに我々は共感し、新しい美術館のビジョン、ミッション、コンセプトを考えてきたところである。

今回調査した比較項目の中で「社会性」、「経済性」、「環境性」それぞれ大事な項目だとは思いますが、我々が主に議論した社会性に関わるビジョン、ミッション、コンセプトを実現することが最も重要である。しかし、今回、新聞等の報道では、3案の「経済性」について、多く新聞記事に載っており、我々が議論してきた美術館のあり方については、十分に周知されていないように思われる。

今後、ソフト面を議論し、どういった美術館にしていきたいのかという部分は大事だが、ワクワクする美術館をつくりたい、ということからすると、改修+収蔵庫増築のA案は3案の中で、ワクワク度は低い。

経済性に関して、道民の皆さんの税金を使うので、考えなくては行けないが、本調査ではイニシャル、ランニングコストだけが試算されていて、その信憑性を検証しなければならないし、更にワクワクする美術館を造り、美術館自体が収益性を上げる、美術館自体がお金を稼ぐ、という経済的な波及効果に関する試算も必要である。

環境性の樹木の伐採については痛ましいことだとは思いますが、元々原生林ではない。30~50年先を見据えた造園や、伐採する木をどのように回復するかを考える必要があるのではないかと。

近美を移転新築することとなった場合、既存の近美をどうするのが決まっていない。文化財として重要な建物なので、例えば北海道立図書館や博物館の分館にする等の活用等、どう活用するかもこれから考えていく課題になる。

(菊地委員)

移転新築案は既存の近美を解体するということが前提になっているか。

(事務局)

解体を前提とはしていない。既存の近美の活用については、C案となった際に改めて検討する。

(菊地委員)

3案のハイブリットも考えられるのではないかと。既存の近美を改修し、活かしながら、不足している機能を新しく造るA+C案。それぞれの規模を縮小したり、適正に見直せば可能なのではないかと。現在の3案のみから決めるわけではないため、今後の検討かと思う。

環境性の評価基準が後ろ向きに感じる。日本でよくされている、マイナスのものをいかに0に近づけていく

かではなく、0からプラスにしていくにはどうしていくのか、というネイチャーポジティブという考え方が世界の潮流になっており、公的な建物だけではなく、ビジネスの世界だとこの考え方を前提としたビジネスモデルが求められている。4つの省庁合同でのとりまとめ（ネイチャーポジティブ経済移行戦略）も公表されているところでもあるので、前向きな評価で環境のことを考えても良いのではないかと。

例えば、樹木の伐採が悪いというのが前提にあるが、建物や敷地をネイチャーポジティブな設計にすることによって、既存の樹木を伐採するが、より樹木の多い敷地にすることも可能になるのではないかと。

ミティゲーションの考え方を前提に、どうしても切らないといけない樹木は切り、別の場所でより多くの自然を再生させることによって、トータルとしてよりポジティブを目指して行く等、色々な対応方法があるのではないかと感じる。

廃棄物についても、解体すると廃棄物が出てしまうという考え方が前提にあると思う。例えば、解体してコンクリートなどをその場で再生し、新しく外構に活用するなどといった技術は世界的に存在する。アプローチの方法をもっと調べれば、廃棄物を出さない方法も十分に考えられる。

どういった建築にしていくのか、どういったアプローチにしていくのかで環境性の部分は大きく変わり、ワクワクするような美術館になるのではないかと。

エネルギーの面でも、できるだけ電力を使わないようなデザインにすれば、ランニングコストも下げられる。環境の評価をより前向きなものにしていくことによって、おそらく経済性の評価も変わっていくのではないかと。

世界の事例を見ると、環境への影響をプラスにしながらランニングコストを下げ、ワクワクするような展示スペースを設けるような事例が多くある。環境性の部分をポジティブな基準で改めて捉え直すと、おそらく社会性、経済性の部分の評価も変わり、ワクワクするような美術館になっていくのではないと思う。海外にはサンフランシスコのカリフォルニア科学アカデミーの建築など、環境に配慮したデザイン的にもワクワクする素晴らしい公共建築がたくさんあるので、参考になるのではないだろうか。

ネイチャーポジティブも踏まえて、再度評価し直すとは全く違った美術館像が見えてくるのではないかと。

（佐藤委員）

移転しなかった場合、知事公館エリアとの関係がない様に見える。関係性を持ちながら比較した方がよいのではないかと。今後の検討が必要なのかも知れないが、レストラン、カフェ、多機能ルーム等の一部を知事公館エリアに移転するというのも考えるべき。

3案を分けて考えすぎなのではないかと。移転しないとなった場合でも、居住区域で協働しながら何か、例えば駐車場の整備等はできないのか。

今後の対応については、知事公館エリアと協働しながら考えていくことを盛り込んだ方がよいのではないかと。3案から決めるという前に、この会議とは別に委員会を上層部に作り、その中で3案と知事公館エリアの活用を通して考えた方がいいのではないかと。今年度中にそういった検討ができればいいのではないかと。

また、太田実先生の建築著作権の話し合いが必要になるかもしれない。

（佐々木幸委員）

資料1-2に書かれている「※参考 該当敷地範囲」の知事公邸等敷地全体の面積が11,946㎡ということか。C案は細長い土地しか確保できないんだなという印象。

資料1-1の略図では近美の移転する場所をまっすぐに表しているが、実際に使うことができるエリアが資料1-2の様に細長いのであれば、形は限定的になるのかなと感じる。事務局としては、この形に沿って建てる前提で検討しているのか。

また、知事公邸等敷地の11,946㎡は近代美術館エリアの敷地面積と比較してどの程度差があるのか。

（事務局）

C案で移転する場合は、知事公邸等敷地の11,946㎡の範囲内に建設を想定している。

近代美術館エリアの敷地面積については、19,152㎡あり、7,000㎡程広い。

移転とした場合は南北に長く、200m程の長さを想定している。資料1-2の「比較に用いる整備規模等」でC案の延床面積を11,510㎡としているが、これは1階建てではなく、2、3階建てを想定しており、あくまでもこの敷地の中で建設する場合にどの程度の規模になるかを記載しているところ。

（佐々木幸委員）

C案で新築すると、敷地を制約された構造で、十分な収蔵庫や様々な近美の機能がうまく実現できるという

が、その可能性は実際に設計してみない限りわからないということか。学芸員や現場に携わる方の意見を踏まえて選択していかないといけないと思う。

(佐々木亨委員)

経済性の部分で、建設に係る費用、50年分のランニングコストが数字として出てくることはわかるが、これだけを見ると、入館料で得られる額も多くないため、ただお金が掛かる施設に見えてしまう。

実際は、新たなコンセプトの美術館を展開することで、経済波及効果、市場を通る価値も出てくる。今は文化的な活動だと、市場を通らない価値も経済学では計っており、外部便益を計り、仮想評価法などを行うと、美術館があることでアイデンティティが保たれる、我々は使わないが子どもの代に繋いでいくことによる価値があるといった、市場を通らない価値も金銭化できる。

コストだけで見れば安い方が良いが、美術館が出している価値がどれだけあるのかをある程度示すことができれば、多少高額になってもこれはやるべきという意見が出てくる可能性が十分にある。イニシャル、ランニングコストだけで数字を出すのは、あまりよくないのではないか。美術館の目に見えない価値の部分も数値化してもいいのではないか。

リニューアルすることによる「ワクワク」は誰もが期待している部分。一方で、都道府県立規模の美術館では、大規模改修を行い、その後の活動が目に見えて活発になって評価されている美術館もある。そういった美術館はミッションの入れ替えを行い、それを実現している。博物館の運営上の望ましい基準の中でも、美術館の運営はミッションドリブンでやりなさいとなっており、外部目線でも訴える大事なポイントになってくる。近年改修でうまくいっている美術館はミッションドリブンの経営に移っており、そこで差が出ているように感じる。

近美のホームページでも新しいビジョン、ミッション、コンセプトを掲げているが、学芸側としてはこれらを実現していくために、休館期間の長さや、建物の自由度といった美術館活動に係る長所、短所の部分をどう捉えているのか。

コンセプトのコラボレーションについては、地域社会や他文化施設と組むという話だととらえており、コンテンツの連携ではなく、社会的な課題で連携するというのが、今のコラボレーションの進み方だと考えられるが、そういう意味でも、休館期間や建物の自由度などがどのように影響するのか。休館期間は新しいコンセプトを実現するための準備や仕込みの期間になると思うので、そこも含めて学芸の方の意見を伺いたい。

(中村学芸副館長)

個人的な見解としては、3案を比較した場合、A案は自由度が低い。

A案では、現在の建物の枠内で部屋割りを変えるという方法になる。ビジョン、ミッション、コンセプトの達成のために求められる機能を考えると、欲しい部屋が候補として上がってくることになるが、具体的に現在の全体スペース内でどこまで調整しきれなのか、建物の構造的に部屋割りをどの程度まで変えられるのか、検討できていない。諸室の規模や配置の自由度が低いことが、ビジョン、ミッション、コンセプトの実現にあたり大きな枷となる可能性は想像される。

Cの移転新築は、土地の形状に縛られる課題はあるが、1から様々なことを考えることができる。ビジョン、ミッション、コンセプトを実現していくための自由度が最も高いものであると感じている。

今年からウィズ・キッズに基づいた展示、札幌のギャラリー等とのコラボレーションの展覧会を始めることとした。休館期間中にもアウトリーチ活動、調査研究を中心にビジョン、ミッション、コンセプトの実現に向けた活動を行っていききたい。

(佐々木亨委員)

ビジョン、ミッション、コンセプトが実現する時に、この活動があるから、この整備方法は正しかったと言われたいいけない。

今、この整備手法ではできません。と言いたくなる気持ちはわかるが、ちゃんとソフト面が先行していて、それに基づいた整備手法であるという議論を進めるのが正しい進め方なのではないかと思う。

ビジョン、ミッション、コンセプトに紐付くような事業、イベントをどんどんアピールしてもらえれば良い方向に進んでいくのではないかと思う。

(佐藤委員)

最近の記事を見ていると、いわゆる建築に関わる経費の問題ばかりが出ている。

我々が何年か掛けて、ビジョン、ミッション、コンセプトの「どういう美術館にしたい」ということをはっきりと掲げたが、余りにも伝わってないと感じる。

皆様方も忸怩たる思いがあるんじゃないかと思うが、是非、強調していただき、良い美術館を作るような動きになっていければいいと思う。

(2) 議題2 知事公館・近代美術館エリアに係る道民等からの意見聴取の結果について

ア 事務局から資料1-1、1-2に基づき説明

(特記事項)

・なし

イ 質疑応答等 (有・無)

(北村委員)

近美の保全に関して、札幌市と札幌市以外の住民の意見が異なっているようだが、区分けしている意見項目のレベルがそろっていないので、単純に「保全」か「建替」かのどちらかが優勢な意見だと考えることはできない。

第12回これからの北海道立近代美術館検討会議 出席者名簿

○ 構成員

(敬称略、五十音順)

所 属	職	氏 名	備 考
株式会社h a k u	代表取締役	菊地 辰徳	
北海道大学	名誉教授	北村 清彦	
北海道教育大学釧路校	教 授	佐々木 宰	
北海道大学大学院文学研究院	教 授	佐々木 亨	
前札幌芸術の森美術館	館 長	佐藤 友哉	

○ 事務局

所 属	職	氏 名	備 考
北海道教育庁	生涯学習推進局長	山崎 義一	座長
北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物館課	課 長	菅野 泰之	
	道立近代美術館担当課長	佐藤 昌彦	
	課長補佐	田中 猛之	
	係 長	佐伯 圭介	
	主 任	宮下 直之	
	主 任	中林 恭良	
北海道立近代美術館	副 館 長	松田 俊也	
	学芸副館長	中村 聖司	
	総務企画部長	熊澤 栄司	
	学芸部長兼学芸統括官	村山 史歩	
	総務企画課長	富田 拓貴	